

岡倉天心の『東洋の理想』とは何か

三谷 竜彦

序

「アジアは一つである (Asia is one)」という有名な一文ではじまる、岡倉天心の『東洋の理想』は、1903年にロンドンで英語で刊行された。この時代、アジアは近代ヨーロッパの猛威にさらされて衰退していく一方であった。それは軍事・産業・技術などの面だけではなく、文化・思想などの面でもそうであった。そんな時代に天心は、軍事・産業・技術などの面でもそうだが、何より文化・思想などの面でアジアの復権を図ろうとしていた。天心は『東洋の理想』の中で、はたして何を一なるアジア——天心にとって「アジア」と「東洋 (the East)」とは基本的に同義であり、本稿では以下、引用などを除いて基本的に「アジア」の表記を採用する——の文化・思想などの理想として描き出し、復権させようとしていたのだろうか。本稿はこのことを、『東洋の理想』のテキストに沿いながら考察して、明らかにしたい。

このような、『東洋の理想』のテキストを思想面で内在的に精緻に読解するという試みは、従来あまりなされてこなかったようであるが、大まかな解釈としては、従来は一般的に、天心の『東洋の理想』の最も重要な柱は仏教だと考えられてきたようである。そのように考えられてきた主な根拠は、天心が比較的早い時期から仏教に傾倒していたこと⁽¹⁾や、天心が1901～1902年にインドに滞在した際に仏教遺跡の探訪などから大きな影響を受けたこと⁽²⁾などである。じっさい『東洋の理想』のテキストの大部分を占める第6節～第14節は、主にインド・中国・日本（とりわけ日本）における仏教の展開についての記述に充てられている⁽³⁾。だが本稿では、このような従来の一般的な解釈とは別の解釈を、あくまで1つの可能な解釈としてであるが、提示してみたい。それはすなわち、仏教よりも儒教の方が、天心の『東洋の理想』の最も重要な柱だったのではないかという解釈である。

1 アジアの2大文化・思想

まず単純に『東洋の理想』のテキストを読んでみると、天心は儒教と道教と仏教という3つをアジアの文化・思想の柱ととらえているように思われる。だがじっさいには、その中で道教がもつプレゼンスは、かなり小さいのではないかと思われる。むしろ天心は、儒教と仏教という2本の柱としてとらえていたと解釈するのが適切であるかもしれない。例えば冒頭の「アジアは一つである」の文につづく次の2番目の文にも、そのことがあらわれているといえるかもしれない——以下の文には「ヴェーダ」と書かれているが、天心の理解では、仏教はヴェーダの個人主義の伝統を引き継いでいる——。

「ヒマラヤ山脈は、二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義をもつ中国文明と、ヴェーダの個人主義を持つインド文明とを、ただ強調するためのみ分っている」（岡倉 [2012] 195 ページ）。

だが、これにとどまらずにもう少し踏み込んで検討していこう。

天心は、第3節「儒教——北方中国」の中で、儒教について論じている。彼によれば儒教は、上記のように共同社会主義の思想である。すなわち儒教では「人生の最高の規範は、共同社会に対する個人の自己犠牲」である（岡倉 [2012] 210 ページ）。したがって芸術であっても「社会の道徳的行為に役立つことのゆえに尊重せられていた」のである（岡倉 [2012] 210 ページ）。「音楽が最高位に置かれ、その特殊の機能は、人と人、社会と社会とを調和せしめることにあるとされていた。それゆえに、音楽の研究は、君子たるべき周の青年の第一に修むべきものであった」（岡倉 [2012] 210 ページ）。天心によれば、孔子も音楽を大いに愛していた。絵画もまた「それが徳の実践を説き教えることのゆえをもって貴ばれた」（岡倉 [2012] 211 ページ）。「孔子はその家語の中で、周の諸王の靈廟を訪れたことを語り、……幼帝成王を腕に抱く周公の像の描かれているさまを述べて、これを古の専制の暴君桀と紂が一身の快樂を事としているさまを描くもう一つの絵と対照させて、それぞれの図に描き出されている榮光と卑劣とについて説いている」（岡倉 [2012] 211 ページ、ただし振り仮名は

引用者による)。その他の芸術のジャンル、例えば詩歌や文芸や工芸もやはり同様に、共同社会主義思想にふさわしいか否かが、その評価の基準となる。

つづいて天心は、第4節「老荘思想と道教—南方中国」で道教について論じている。天心によれば、道教は、「公共の利益」を重んじる儒教の「共同社会主義」に対する「個人主義的反動」である（岡倉 [2012] 221 ページ）。例えば老子の『道德経』に、「自己の中に退いて習俗の束縛から自我を解放することの偉大さ」が描かれている（岡倉 [2012] 219 ページ）。そして周期の末以来、道教は、「儒教的中国がインドの理想主義を受け容れ」、「これらアジア思想の相互に対立する両極」が共同展開していくための、「心理的基盤を準備」した（岡倉 [2012] 218 ページ）。

このように天心にとって、道教はやはりそれほど重みをもたされていないようである。天心にとってやはり儒教と仏教とがアジアの2大文化・思想であり、道教はその2つを仲立ち・橋渡しするという程度のものでして理解されていたと解釈するのが妥当なところではないだろうか。

2 仏教の2大要素

天心は第5節「仏教とインド芸術」で仏教について論じているが、仏教を明確に特徴づけることは困難だったようである。「かの大教主 [= 仏陀] の思想が、さまざまな国や時代と接触するにしたがってそれぞれに取ったいくつかの形態は、これをその真の発展の順序にしたがって分析し叙述することは、まことに困難である」（岡倉 [2012] 230 ページ）。そんな困難な状況下で彼が試みた仏教の特徴づけは、次のようなものである。

仏教には大きく2つの要素がある。第1の要素は、「仏陀の託宣は、魂の自由の託宣」だというものである（岡倉 [2012] 233 ページ）。これが仏教の個人主義、つまり共同社会にとられることのない個人の自由・解放であり、この点で仏教は道教と親和的である。

一方、第2の要素は、慈悲の心である。「もの言わぬ畜生をも人間と同一の高さに引き上げたところのあの慈悲の熱情」である（岡倉 [2012] 233 ページ）。仏陀は「万人に平等と同胞関係をとを宣言しているのをわれわれは見るのである。儒教的中国の感

情にはなほ近いこの第二の要素こそ……彼の教えをして、人類の全体ではないにしても、全アジアを包容することを得しめたものであった」（岡倉 [2012] 233～234 ページ）。この第2の要素は儒教と親和的である。

こうして見てくると、仏教は儒教と道教との両方と親和的であり、両方の要素も持っているといえるのであるが、やはり個人主義の方が第1の要素とされていることから、仏教は第1に個人主義的思想であると特徴づけられているのであろう。

3 アジアの文化・思想の第1の柱

天心は、つづく第6節～第14節において、主としてインド・中国・日本における文化・思想などの歴史的展開について論述した後、最終節である第15節「展望」において、近代ヨーロッパの猛威がアジアに押し寄せている現状を嘆き、アジアの文化・思想などの復権を強く訴えている。彼による近代ヨーロッパ的なものとアジア的なものとの対立としては、まず産業化・技術力の程度が挙げられる——以下の引用の中で述べられている、産業化・技術力の未発達なアジアのありさまというのは、じっさいにはアジアに特有のものというよりは、むしろアジアに限らずヨーロッパも含めて全世界的に見られる近代以前の社会のありさまであろう——。

「アジアの簡素な生活は、蒸気と電気とのために今日それが置かれたヨーロッパとの鋭い対照を、豪も恥とする必要はないのである。古い交易の世界、職人と行商人の、村の市場と聖者の縁日の世界、そこでは小舟が国の産物を積んで大きな河を上下し、どこのお邸にも内庭があつて、そこに旅商人が布地や宝石を並べ、美しい深窓の婦人たちがそれを見て買うといった世界、そういう世界は、まだまったくは死んでいないのである」（岡倉 [2012] 340 ページ、ただし振り仮名は引用者による）。

近代ヨーロッパには、「時間を貪り食らう交通機関のはげしい喜び」があるが、一方、アジアには、「巡礼や行脚僧という、はるかにいっそう深い旅の文化」がある。「村の主婦にその糧を乞い、あるいは夕暮の樹下に坐して土地の農夫と談

笑喫煙するインドの行者こそは、真の旅人だ。「彼にとっては、一つの田舎はその自然の地形のみから成っているものではない。それは……人間的要素と伝統との、結合したものであり、そこに住む人の身の上に乗ったドラマの喜びと悲しみとを、たとえ一瞬にせよ分ち合った人の、やさしさと友情とにあふれているものなのである。……/……このような様式による相互のやりとりを通じて、教養の真の手段としての、印刷された索引にあらずして、人間的交わりの、東洋的な観念が維持されるのである」(岡倉 [2012] 340～341 ページ)。

だが産業化・技術力の程度よりも重要な点は、すぐ上の引用文中でもじつは多少触れられている点でもあるが、人と人の親密なつながり・絆・思いやりこそが、アジア的なものの特長とされている点である。

「対照の連鎖はどこまでも引き伸ばすことができよう。しかし、アジアの栄光は、これらよりももっと積極的な何ものかである。それは、すべての人の胸に脈打つ平和の鼓動の中にある。帝王と田夫とを合一させる調和の中にある。あらゆる共感、あらゆる礼讓をその結果たらしめるところの、崇高な同心一体の直観の中にある。これがために、日本の高倉天皇〔醍醐天皇とあるべきか〕（ちくま文庫版の注釈）は、貧しき民草の炉辺に冷く霜が降りているからと言われて、ある冬の夜に寝衣をお脱ぎになった」。「唐の太宗は、民が飢饉に苦しみ悩んでいるのゆえをもって、食を棄てた」(岡倉 [2012] 341～342 ページ、ただし振り仮名は引用者による)。

「これらのものが、アジアの思想、科学、詩歌、芸術の秘められた力である」が、いまや西洋文明に駆逐されようとしている(岡倉 [2012] 342 ページ)。「ここに於て、今日アジアのなすべき仕事は、アジアの様式を擁護し回復する仕事となる。しかし、これをするためには、アジアみずからがまず、これらの様式の意識を確認し発展させなければならない」(岡倉 [2012] 342～343 ページ)。天心によれば、日本はこのような自己認識のおかげで西洋列強の進出の嵐に耐えることができた。そして他のアジア地域にも、日本と「同じ自覚の再生」が必要なのである(岡倉 [2012] 344

ページ)。

さて、上述のように、アジアの文化・思想の2本の柱は儒教と仏教とであった。ここにいたって、彼が最も重要視している柱が儒教的なものの方であるということが明らかになったといえるのではないだろうか。それは、「仁」に代表される共同社会主義である。そしてこの要素はじっさい仏教の中にも第2の要素として組み込まれているものでもあるのだ⁽⁴⁾。

おわりに

現在、むしろ欧米の方で、産業文明・技術文明へのアンチテーゼとしてのスローライフが盛んに提唱されている。このスローライフには、人々のつながり・絆の重視という要素も一般的に含まれている。日本でも、2011年の東日本大震災の際の原発事故という、産業文明・技術文明のほころびに直面して、「絆」が人々の暮らしの重要なキーワードになった。天心が夢みたアジア的な世界へと、もしかしたら少しずつではあるが、欧米や日本は近づきつつあるのかもしれない。そして中国は、アジア的なものの最も枢要な柱である儒教を生み出した国である。その中国こそ、東洋の理想の実現において世界をリードできる潜在力を有しているのではないだろうか。そんな期待をいだきつつ、本稿における考察を終了したい。

註

- (1) 坪内 [1998] 2～26 ページ参照。
- (2) 岡本 [2013] 100～155 ページ参照。
- (3) テキスト・クリティーク的なことをいえば、冒頭の第1節「理想の範囲」および最終節の第15節「展望」は、1901～1902年のインド滞在時に執筆されたが、それ以外の大部分は、それ以前から執筆されていたようである。そもそも天心

は当初『東洋の理想』を「日本美術史」として構想・執筆していたようであり、第1節および第15節以外の部分は、その、当初「日本美術史」として構想・執筆されていた部分に当たると考えられている（坪内 [1998] 9 ページ；塩出 [2011] 36～41 ページ参照）。

- (4) 『東洋の理想』とおそらく同時期に執筆され、死後に草稿が見つかった『東洋の眼覚め』では、仏教に関しても共同社会主義的要素が強調されている。「慈悲」の語は仏教思想のすべてである。ちょうど「仁」の語が儒教のすべてであるのと同じように。それは、残りの全人類が救済されるまでは涅槃の楽境を拒絶したアディ・仏陀と菩提薩埵（菩薩）との自己犠牲の行為に表現されている。またそれは、飢饉が自国を蔽うている間は断食し、農民達が炉辺にいてさえ寒い霜に身をさいなまれている時には、暖い着物を着なかった君主達の言行録にもその例証を見出すのである。それは、この同情を物言わぬ禽獣にさえも及ぼし、病んだり年老いたりした動物のために万全の策を講じるという大きな仁愛の心が、証明しているであろう」（岡倉 [2012] 380 ページ）。

引用文献

岡倉天心『茶の本／日本の目覚め／東洋の理想 岡倉天心コレクション』、ちくま学芸文庫、2012年

主要参考文献

- ・ 岡本佳子「ベンガルの民族主義と天心岡倉覚三——「アジア」が内包する文化的ナショナリズムの拮抗——」（岡倉登志、岡本佳子、宮瀧交二『岡倉天心 思想と行動』、吉川弘文館、2013年、100～155 ページ）

- ・ 小路田泰直『日本史の思想 アジア主義と日本主義の相克』、柏書房、1997年
- ・ 塩出浩之『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』、山川出版社、2011年
- ・ 坪内隆彦『岡倉天心の思想探訪 迷走するアジア主義』、勁草書房、1998年

※本稿は、2014年9月13日に北京外国語大学日本学研究センターで開催されたシンポジウム「近代日本・中国における哲学思想の再検討——今日の「思想混迷」をいかに切り拓くか——」（「明治期〈日本哲学〉の可能性」研究グループ／中華日本哲学会共同国際シンポジウム）で発表させていただいたものである。当日に参加された各位および関係者各位に、この場であらためて謝意を表す。